

# カムリウミスズメ事業報告

(1995 年度～2008 年度)



2009 年 6 月

カンムリウミスズメ事業報告  
(1995年度～2008年度)

目次

1. はじめに	2
2. 三宅島のカンムリウミスズメの繁殖地・大野原島について	3
3. カンムリウミスズメ調査・研究部門事業報告	
(1) カンムリウミスズメ洋上分布調査	5
(2) 三宅島大野原島・子安根における営巣状況調査	17
4. カンムリウミスズメ普及部門事業報告	
(1) カンムリウミスズメセミナー 「カンムリウミスズメの現状と保護」の開催	21
(2) カンムリウミスズメウォッチングツアーについて	25
5. さいごに	27

## 1. はじめに

カンムリウミスズメは、日本周辺と韓国南部の離島や岩礁でのみ繁殖するウミスズメ科の海鳥である。カンムリウミスズメの推定個体数は5,000羽から10,000羽と極めて少なく、最も絶滅の心配されているウミスズメ科の鳥である (Piatt & Gould 1994)。カンムリウミスズメは、IUCN (国際自然保護連合) レッドリスト危急種、国指定天然記念物、環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、我が国が保護活動を行わなければ絶滅する恐れがあり具体的な保護対策の検討が急務である。

伊豆諸島では、過去にはほとんどの島で繁殖していたらしいが (樋口 1979) ,現在も繁殖しているとされるのは、新島の根浮岬と早島、神津島祇苗島、三宅島大野原島、八丈島小池根で、伊豆諸島全体では1,000羽とされている (小野 1995)。

調査地となっている三宅島でのカンムリウミスズメの営巣地は、三宅島の西側約10kmのところにある大野原島である。大野原島は1つの島ではなく、8つの小さな岩礁から成り立っている。この大野原島の8つの岩礁のうち最も大きな子安根 (標高114m) でのみカンムリウミスズメは繁殖している。

日本野鳥の会では1995年以降、三宅島アカコッコ館のレンジャーを中心にカンムリウミスズメ保護に向けての活動を実施している。調査については三宅島近海のカンムリウミスズメの洋上分布調査を毎年行っている。この調査は、洋上分布の実態の把握と、洋上で鳥の数をモニタリングすることで繁殖個体群の推移をモニタリングできないかということから始まったものである。また1995年には子安根に上陸をして営巣状況の調査を行った。そして、全島帰島後の運営再開後は新たな取り組みとして、カンムリウミスズメを見てもらおうツアーを開催することで、地域に経済効果を生み出そうと、鳥に負荷を与えないためのルールを設定して、2006年からツアーを開催している。

この報告では1995年から2008年までの日本野鳥の会のカンムリウミスズメの取り組みについて報告をする。

## 2. 三宅島のカムリウミスズメの繁殖地・島について

三宅島は東京の南南西約 180 k m に位置する伊豆諸島の島である。大野原島は三宅島の西側約 10 k m に位置する岩礁の総称である（図 2-1）。大野原島は 1 つの島ではなく、8 つの小さな岩礁から成り立っている（図 2-2）。三宅島から見ると大きい 3 つの岩礁が見えるため、通称三本岳と呼ばれている（写真 2-1）。カムリウミスズメが繁殖している子安根はこのうち最も大きく、標高約 114 m の切り立った岩礁である。上部の急傾斜地にはわずかにスゲの仲間やその他の草本類が生育している。海岸は切り立った岩壁か、もしくはゴロタ石浜と呼ばれる大きな岩からなる転石浜で、漁船が接岸することはできず、人が上陸することはほとんどない。

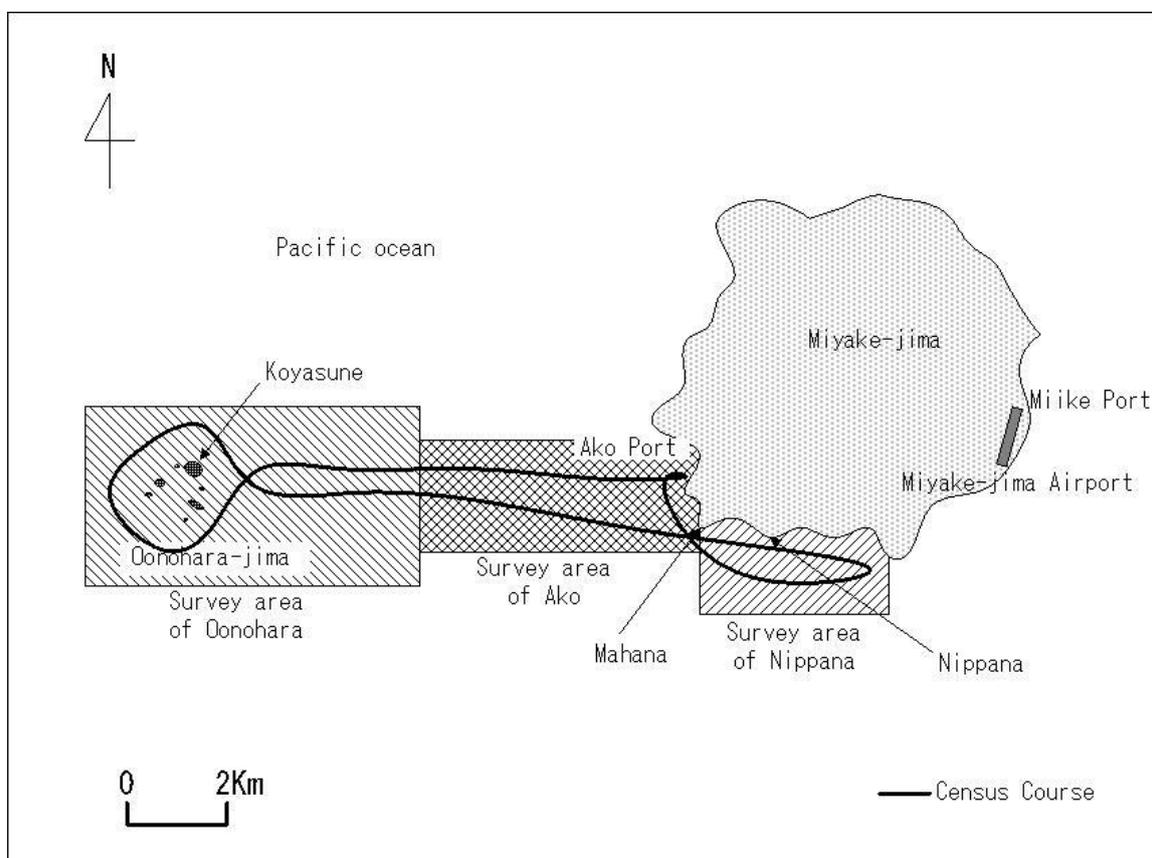


図 2-1. カムリウミスズメ調査コース（三宅島—大野原島）

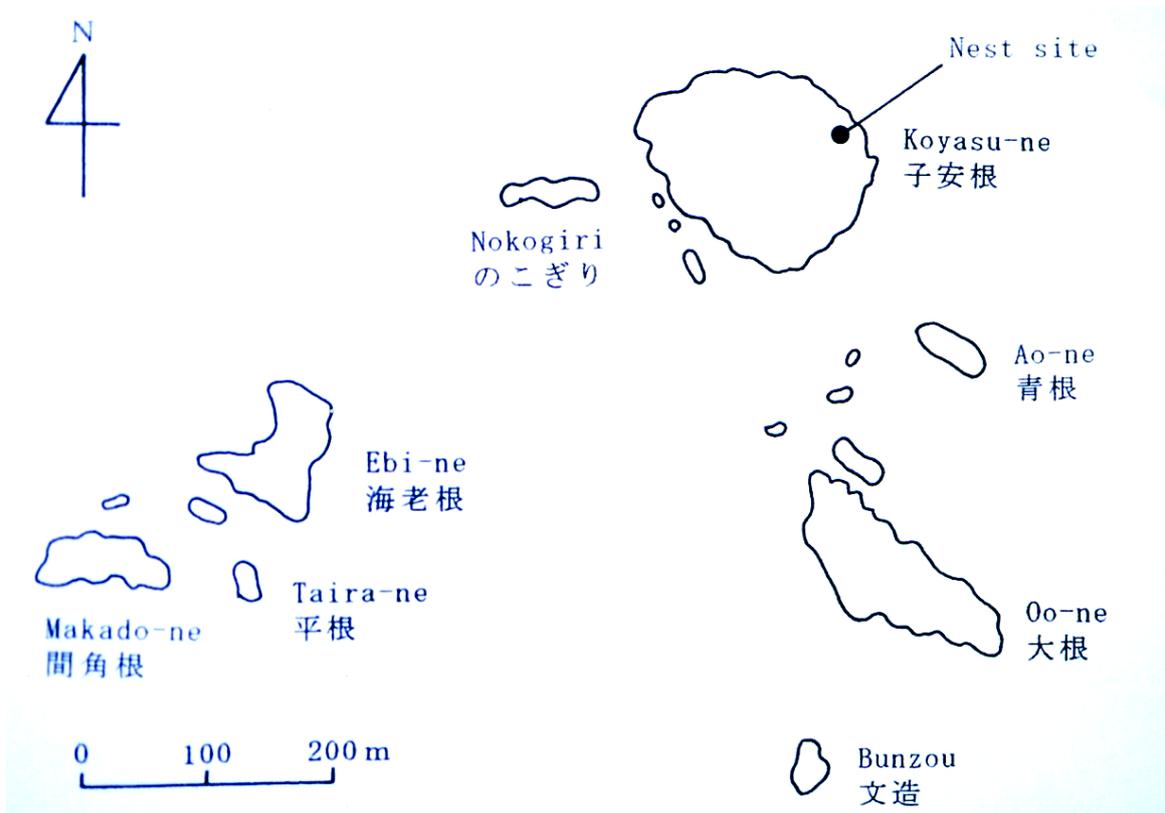


図 2-2. 大野原島



写真 2-1. 大野原島

### 3. カンムリウミスズメ調査・研究部門事業報告

#### (1)カンムリウミスズメ洋上分布調査

##### 調査地および調査方法

調査は、三宅島の西側の阿古漁港を出て、大野原島まで行き引き返し、三宅島の南西の間鼻沖、新鼻沖、立根岬を通過して、阿古漁港に戻ってくるルートで行っている（図 2-1）。カンムリウミスズメの洋上分布調査は 1995 年の 4 月から 2008 年 5 月までに合計 35 回行っている。2001 年から 2004 年までは三宅島雄山の 2000 年噴火により避難をしており、神津島を起点に調査を行った。調査コースが異なっているため、噴火中の結果については分けて報告を行う。通常の調査は 31 回（表 3-2）、避難中の 2001 年は神津島—式根島間で 1 回、2002 年から 2004 年は式根島—三宅島間で 3 回調査を実施した（表 3-3）。

調査は海上を漁船で時速約 10 km で走りながら、船上からの目視で、観察できた個体数とその時刻、また GPS により観察地点を記録した。動揺する船上から海上の距離を把握するのは難しいため、船からの観察幅は特定をしていないが、おおむね漁船の両側 50m を観察した。

##### 調査結果

###### a. 1995 年度から 2008 年度のカンムリウミスズメ洋上分布調査まとめ

まず、その年の最大観察個体数を代表値とした、1995 年度から 2008 年度までの観察結果を表 3-1、図 3-1 に示す。

観察個体数の最大は 2003 年 5 月 6 日の 237 羽であり、次いで多かったのは 1995 年 5 月 11 日の 205 羽であった（表 3-1、図 3-1）。

三宅島海域のみと調査範囲を神津島・式根島まで範囲を広げた結果を比べてみると、拡大して行った 2003 年度が最大ではあったが、カンムリウミスズメの観察数に極端な増加などは見られなかった（表 3-1、図 3-1）。

この後 b・c では三宅島—大野原島間、式根島（神津島）—三宅島間に分けた結果を示す。

表 3-1. 年度別カムリウミスズメの最大観察数について

Year	Date	Time	minute	Individual No. of locations		
				三宅島	三宅島以北 (神津島、式根島海域)	合計
1995	11-May	08:42-12:30	228	205		205
1996	20-May	15:04-17:00	116	122		122
1997	13-Apr	13:00-16:30	210	191		191
1998	6-Apr	13:05-15:35	150	75		75
1999	16-May	13:40-16:05	145	21		21
2000	1-May	13:35-16:20	165	129		129
2001	11-May	10:43-13:10	147	9	7	16
2002	8-May	11:34-16:11	277	10	119	129
2003	6-May	11:55-17:00	305	65	172	237
2004	12-May	5:50-9:50	240	10	26	36
2005	8-May	08:05-10:40	155	134		134
2006	15-May	09:05-11:25	140	38		38
2007	21-May	09:01-11:38	157	16		16
2008	29-Apr	09:01-11:38	157	34		34

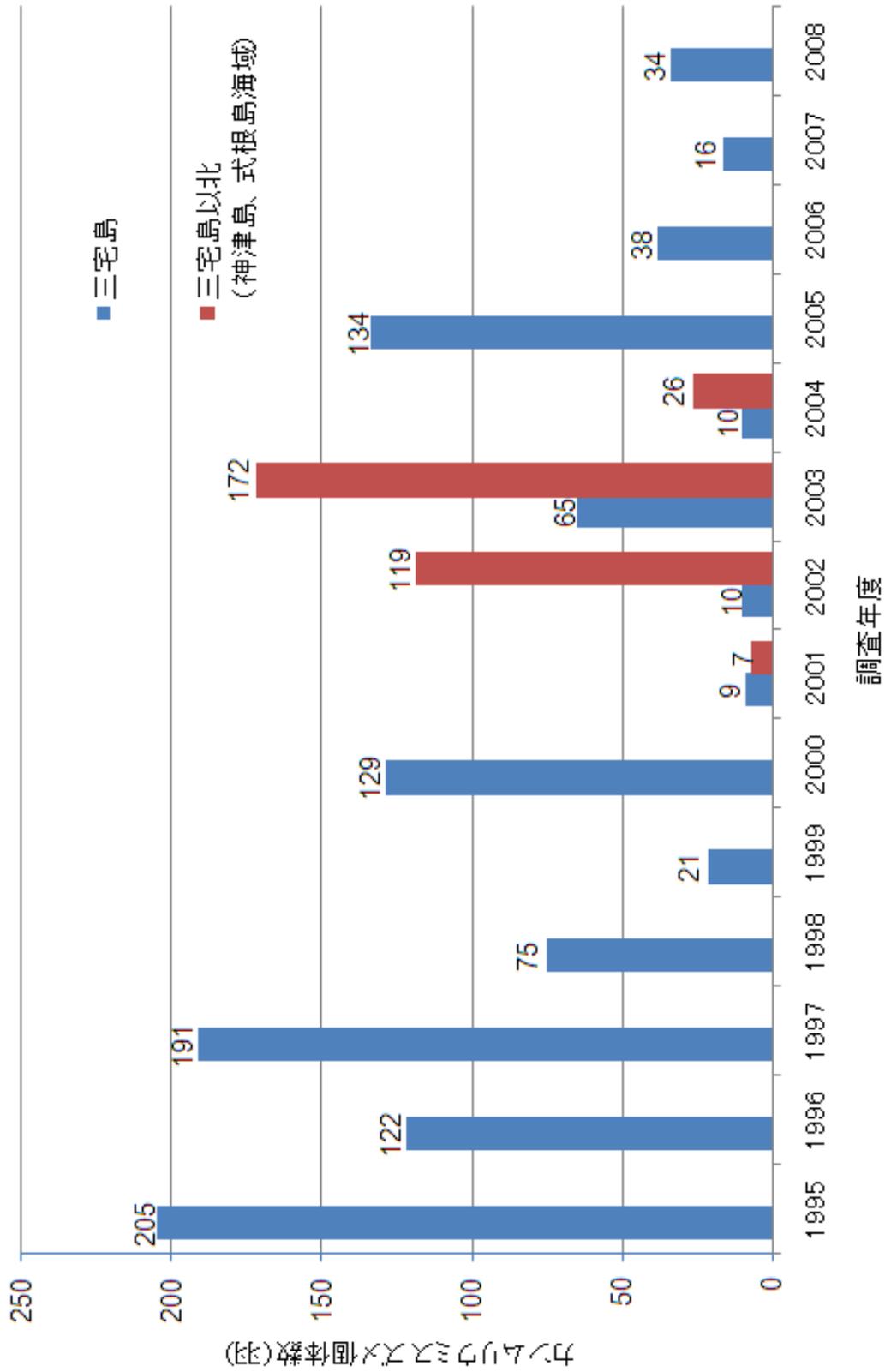


図 3-1. カンムリウミスズメ最大観察個体数の推移

### b.三宅島—大野原島間カンムリウミスズメ洋上分布調査結果

観察結果を表 3-2、図 3-2 に示す。また観察個体数が 2000 年噴火後に最大であった 2005 年 5 月 8 日の洋上分布図を図 3-3 に示す。

海上での個体数調査で観察できた個体数の最大は 1995 年 5 月 11 日の 205 羽で、その他 100 羽以上観察できたのは、1997 年 4 月 13 日に 191 羽、2005 年 5 月 8 日に 134 羽、2000 年 5 月 1 日に 129 羽、1996 年 5 月 20 日に 122 羽、1997 年 5 月 10 日に 109 羽であった（表 3-2）。2005 年以降では、2005 年 5 月 8 日の 134 羽が最大であった。

これらの結果からこの周辺の海域には、少なくとも 100 羽から 200 羽程度のカンムリウミスズメが生息していることが分かった。個体数の増減については、2006 年から 2008 年は 40 羽弱ではあったため減少しているようにも見えるが、海況の影響により調査回数が減ってしまったため、比較を行えるだけの調査を行えていないことに起因していると思われる。この結果だけでは個体数の増減については明らかにできなかった（図 3-2）。

また観察個体数上位 10 回の観察時期の比較については、5 月前半が 5 回（①1995 年 5 月 11 日：205 羽、②2005 年 5 月 8 日：134 羽、③2000 年 5 月 1 日：129 羽、④1997 年 5 月 10 日：109 羽、⑤2000 年 5 月 7 日：89 羽）、4 月前半が 2 回（①1997 年 4 月 13 日：191 羽、②1998 年 4 月 6 日：75 羽）、4 月後半が 2 回（①1997 年 4 月 27 日：73 羽、②1995 年 4 月 27 日：58 羽）、5 月後半が 1 回（①1996 年 5 月 20 日：122 羽）だった（表 3-2）海況や黒潮が当たっているか、外れているのかにも影響を受けているので一概には言えないが、時期による比較では 5 月前半に観察数が多くなる傾向が見られた。5 月前半の時期はカンムリウミスズメが孵化する、繁殖の後半期のステージに入る時期であり、何らかの関連性の可能性があるかもしれないが、これまでの調査では明らかにできなかった。

表 3-2. 三宅島—大野原島間のカムリウミスズメの洋上分布調査結果

Year	Date	Time	minute	Individual No. of locations			Total No.
				Oonohara	Ako	Nippana	
1995	17-Apr	09:00-13:13	253	5	7	27	39
	27-Apr	13:05-17:24	264	55	0	3	58
	1-May	08:10-12:00	230	8	7		15
	11-May	08:42-12:30	228	205	0		205
	25-May	13:15-16:20	185	9	0	0	9
1996	8-Apr	09:07-12:15	188	1	8	8	17
	21-Apr	17:25-18:50	85	19	0		19
	13-May	08:35-10:36	121	0	0	0	0
	13-May	15:05-16:40	95	4	0		4
	20-May	15:04-17:00	116	118	2	2	122
	27-May	14:59-17:00	121	0	0	0	0
1997	13-Apr	13:00-16:30	210	55	77	59	191
	20-Apr	13:10-16:11	181	12	26	1	39
	27-Apr	13:04-16:05	181	27	1	45	73
	10-May	13:05-16:35	210	39	68	2	109
	18-May	13:40-16:10	150	13	6	0	19
1998	28-Mar	13:16-15:40	144	3	5	16	24
	5-Apr	15:30-17:39	129	0	1	7	8
	6-Apr	13:05-15:35	150	27	46	2	75
	11-Apr	13:02-15:31	149	13	16	13	42
	12-Apr	09:25-12:28	183	0	13	0	13
	18-Apr	13:02-15:33	151	3	19	2	24
1999	25-Apr	14:00-16:07	127	1	7	0	8
	16-May	13:40-16:05	145	15	2	4	21
2000	17-Apr	13:38-16:15	157	46	7	0	53
	1-May	13:35-16:20	165	31	31	67	129
	7-May	13:34-16:01	147	25	52	12	89
2005	8-May	08:05-10:40	155				134
2006	15-May	09:05-11:25	140				38
2007	21-May	09:01-11:38	157				16
2008	29-Apr	09:01-11:38	157				34

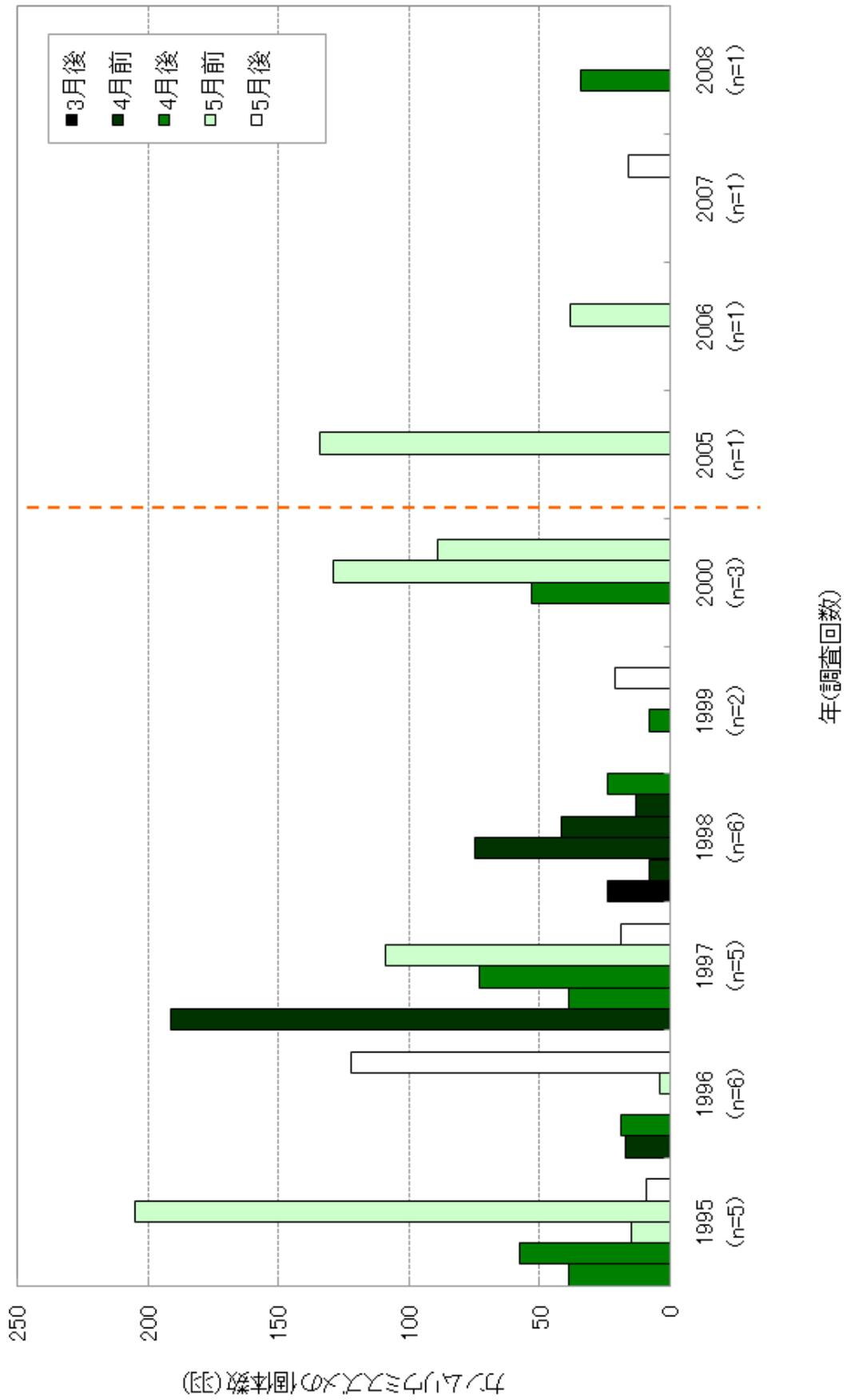


図 3-2. 三宅島—大野原島間のカムリウミスズメの個体数の推移

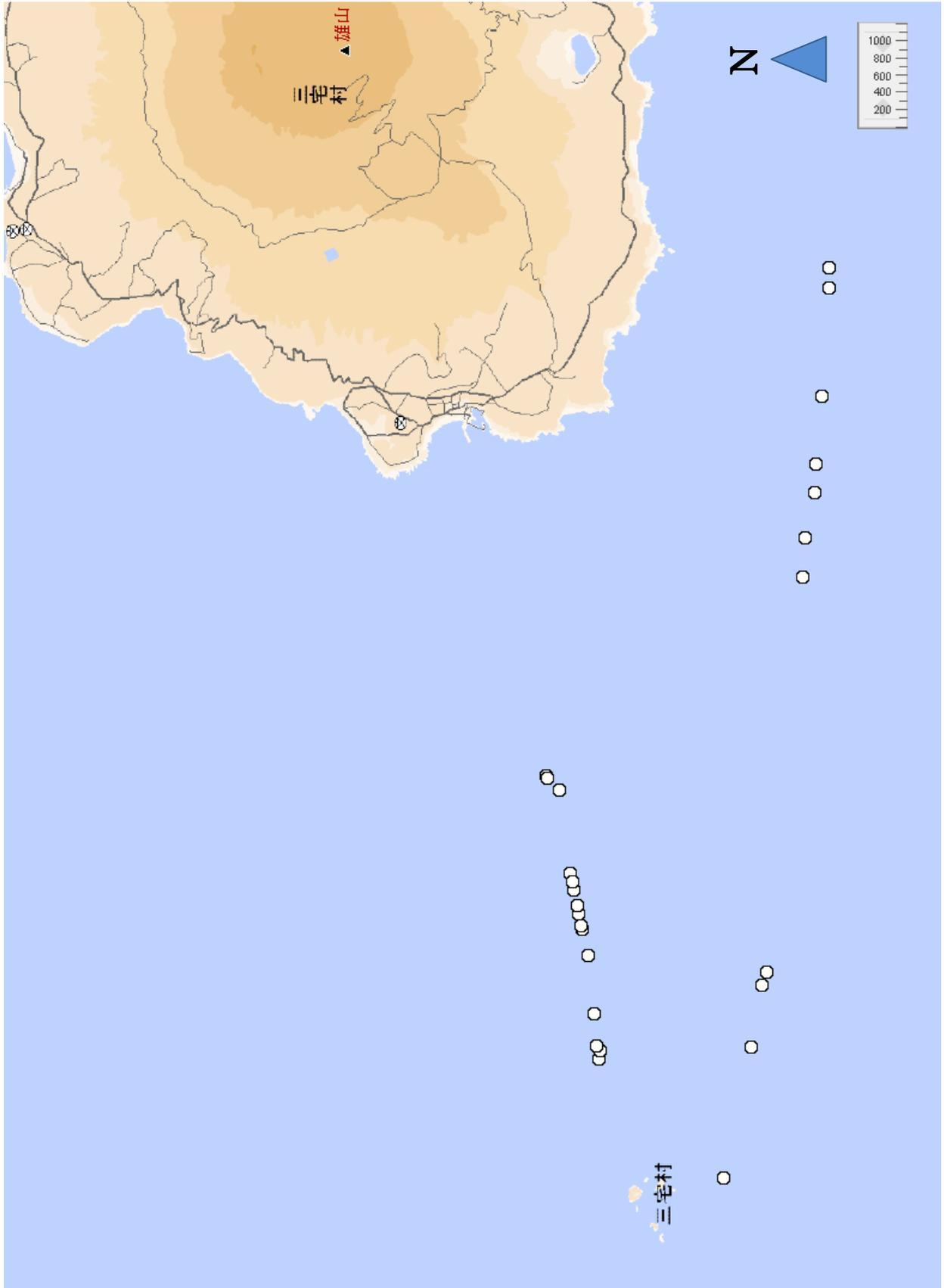


図3-3. カンムリウミスズメ三宅島—大野原島間洋上分布図 (2005年5月8日)

### c.式根島(神津島)ー三宅島間カンムリウミスズメ洋上分布調査結果

観察結果を表 3-3、図 3-4 に示す。また観察個体数が最大であった 2003 年 5 月 6 日の洋上分布図を図 3-5 に示す。

調査は 2001 年が神津島ー三宅島間で、2002 年～2004 年が式根島ー三宅島間で行った。カンムリウミスズメの巣立ちのピークもしくはその少し後の時期と考えられる、5 月 6 日から 5 月 12 日の間に行った。

観察できた個体数の最大は 2003 年 5 月 6 日の 237 羽で、次いで 2001 年 5 月 8 日の 129 羽、2004 年 5 月 12 日の 36 羽、2001 年 5 月 11 日の 16 羽であった (表 3-3)。最小値であった 2001 年以外は、三宅島より北の神津島周辺海域での観察数が多かった (図 3-4)。また年によって観察時期はほぼ一緒であったが観察できた個体数については大きな開きがあった。

観察個体数の年による増減、神津島周辺海域と、三宅島周辺海域での分布数の違いについて、その年の潮の状況など海況や餌条件によって、異なってくるのではないかと推察されるが、調査頻度が少なかったためその要因については明らかにはできなかった。

表 3-3. 式根島ー三宅島間のカンムリウミスズメの洋上分布調査結果

Year	Date	Time	minute	Individual No. of locations		Total No.
				Miyake	Kouzu	
2001	11-May	10:43-13:10	147	9	7	16
2002	8-May	11:34-16:11	277	10	119	129
2003	6-May	11:55-17:00	305	65	172	237
2004	12-May	5:50-9:50	240	10	26	36

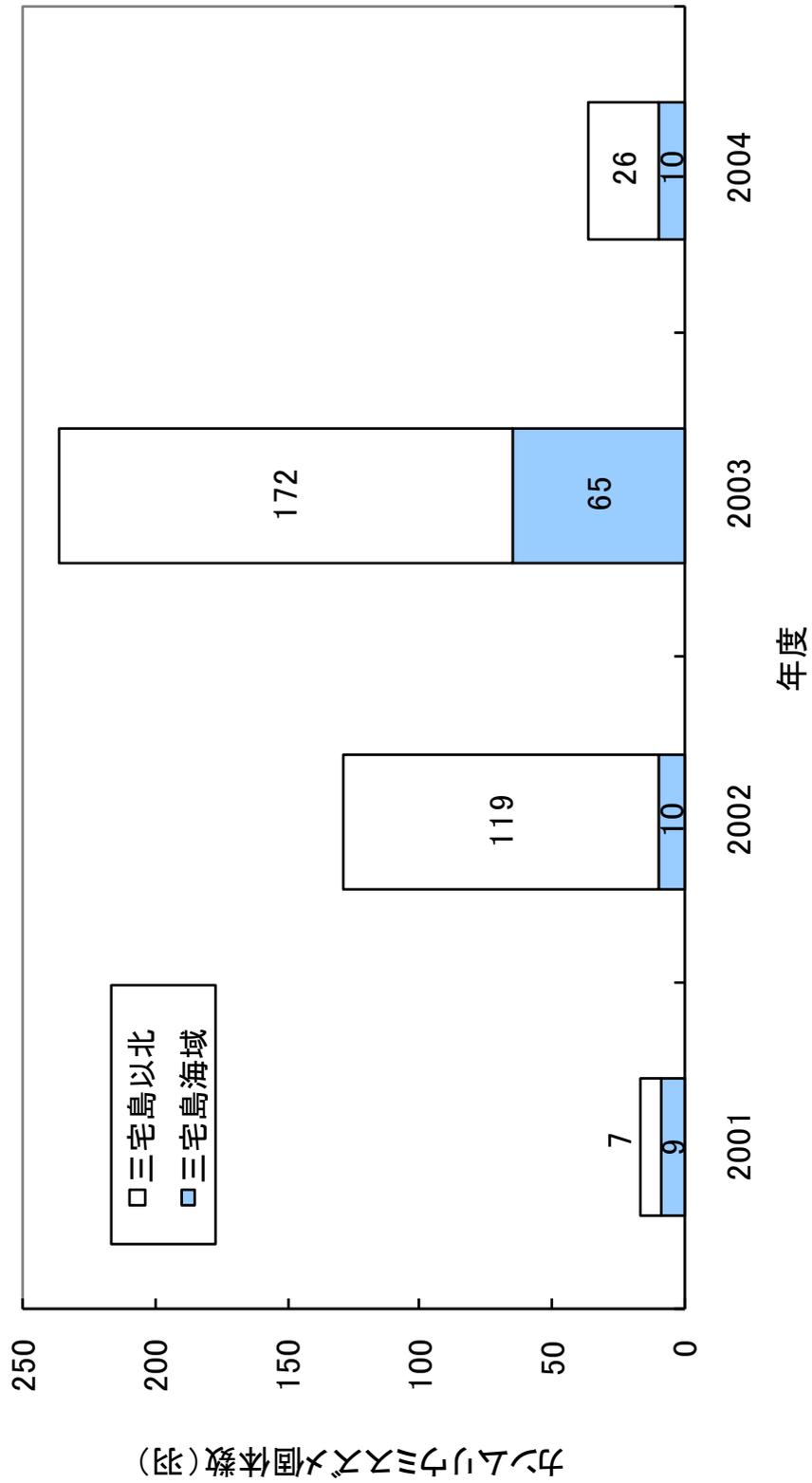


図3-4. 式根島（神津島）—三宅島間のカムリウミスズメの個体数推移と海域による個体数の違い

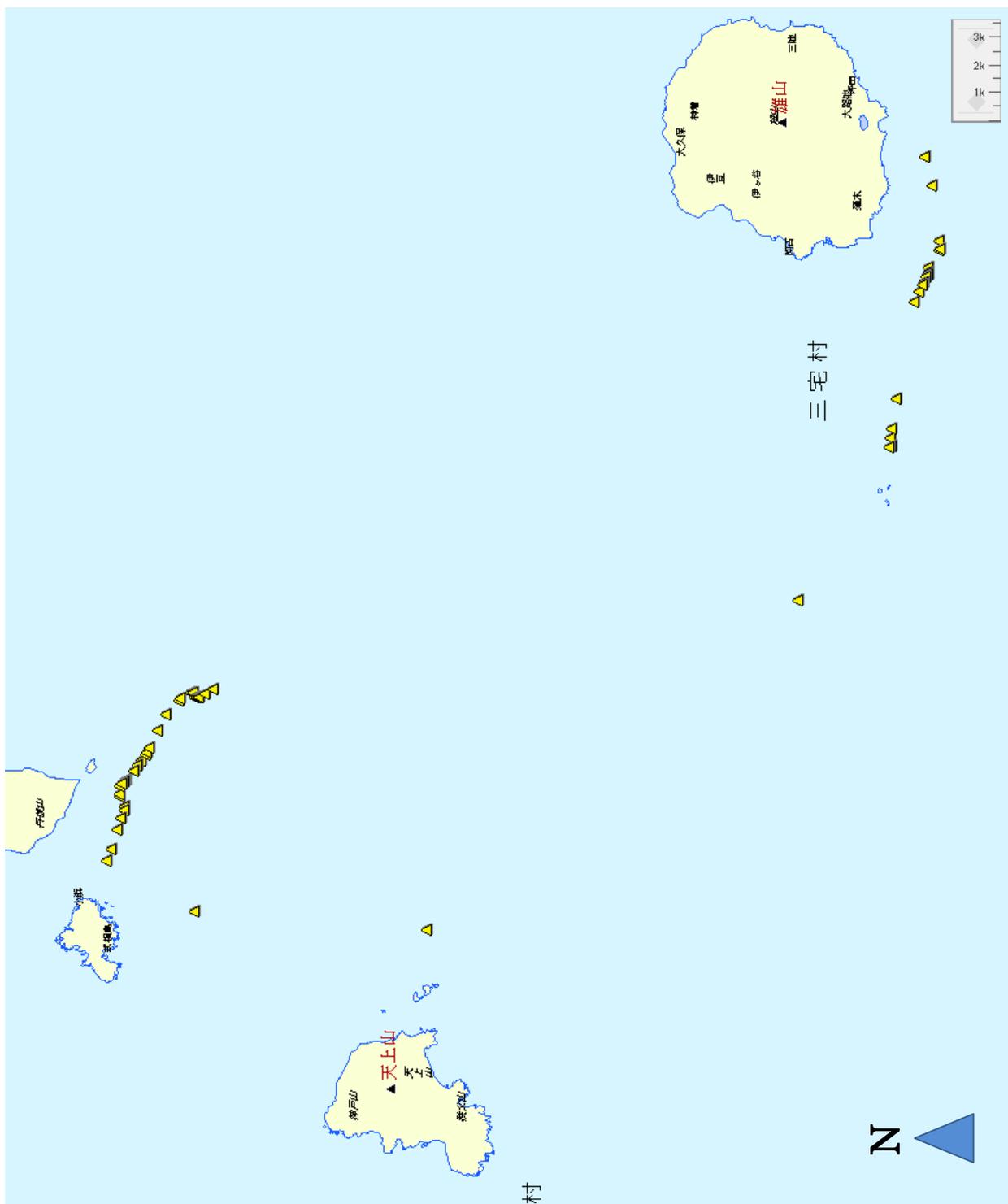


図3-5. カンムリウミスズメ式根島-三宅島間洋上分布図 (2003年5月6日)

## 考察

この地域におけるカンムリウミスズメの利用数の実態をさらに把握していくためには、調査の範囲を広めていくなど、調査方法も変えて行っていく必要があるだろう。三宅島の漁師によると、潮目のでき方や、黒潮の当たり方によってカンムリウミスズメが繁殖地の付近に個体群が集中したり、また分散している（北川氏私信）との観察情報がある。潮の影響を受けて、カンムリウミスズメが分散する際にどのあたりまでの海域を利用しているのかを今後明らかにできれば、三宅島周辺海域のカンムリウミスズメの利用実態が把握できるようになるのではと思われる。今後の課題としたい。



写真 3-1. カヌムリウミスズメ



写真 3-2. カヌムリウミスズメ調査風景

## (2)三宅島大野原島・子安根における営巣状況調査

### 調査方法

営巣状況の調査は1995年5月1日に子安根に上陸して行った。調査範囲は岩とゴロタ石からなる海岸部だけで、子安根の面積のおおよそ4割程度である。海中から切り立ったがけになっている南西岸と中央部の崖およびその上部の草地は、過去にはこの崖の上部の草地でも営巣が見られたが（佐々木弘佳 私信）、斜面の風化が激しく、到達するのに危険が伴うため調査はしていない。調査では巣の数と位置、卵の数、親鳥の抱卵状況、親鳥の死体や壊れた卵の数などを記録した。巣は岩の隙間を懐中電灯で照らしながら探し、1994年の調査で営巣が確認された場所については、特に入念に巣を探した。営巣状況の調査に費やした時間は約1時間30分である。

### 結果および考察

上陸調査により東岸の鳥居の上部で3巣を確認した。いずれの巣も標高10~15m程度の岩場の岩の隙間にあった。卵は岩の上に直接あり、巣材らしきものは使われていなかった。巣1は、積み重なった岩の入口から約1mの位置に卵が1個あった。巣2は、入口から約30cmの位置に卵1個があったが、直径1cmほどの穴が開けられていた。巣3は入口から約40cmの位置に卵が1個あったが、やはり直径1cmほどの穴が開けられていた。孵化に失敗したものか捕食者により開けられた穴なのかは判別できなかった。また3巣とも親鳥の姿は確認できなかった。

そのほかに割れた卵の殻のかけらを、東岸の鳥居近くと北岸で確認した。いずれのかけらも卵1個分に相当するぐらいで、岩の上に放置されていた。卵の内容物はみとめられず、捕食痕も確認できなかった。しかし、周囲1mぐらいの範囲には営巣地として利用可能な岩の割れ目などはなかったため、捕食された物と考えられる。

成鳥の死体は、鳥居付近で16羽、北東岸で9割、北西岸で2羽の計27羽確認した。いずれの死体も腹部や胸部を何者かに食べられており、頭部と胴体が切断されているものや羽毛のみが散乱している例も見られた。

巣の数は、調査日が約1ヶ月ずれているために簡単には比較できないが、1994年の調査では卵の殻だけが残る巣も含めて9巣を確認しているのに対し、1995年の調査では3巣しか確認できなかった。また、営巣地で見つかった捕食された成鳥の死体の数は、

1994年の調査では6羽だったのに対し、今回の調査では27羽であった。

カンムリウミスズメの個体数減少の原因としては、洋上での漁網による混獲 (Piatt & Gould 1994)、営巣地でのネズミ類による捕食 (武石 1987)、ハシブトガラスによる捕食 (東京都労働経済局農林水産部林務課 1994)、ハシボソガラスを含むカラス類による捕食 (小野ほか 1994) が指摘されている。大野原島では、幼鳥がウミネコに捕食されるところが1994年4月に子安根の鳥居付近で目撃されている (佐々木弘佳 私信)。また、1994年にCarterらの調査に同行して行った調査では、ハヤブサに捕食されたとと思われる成鳥の死体を確認している。今回も調査中に繁殖地周辺でハシブトガラスとハヤブサが観察され、これらの種が捕食に関わっている可能性が考えられた。

個体数の少ないカンムリウミスズメにとって、捕食率が高いことは個体数変動に大きな影響を与えると考えられる。今回、27羽の成鳥の捕食痕が確認されたので、これらが何により捕食されたのかを明らかにし、適切な対策が立てられることが望まれる。

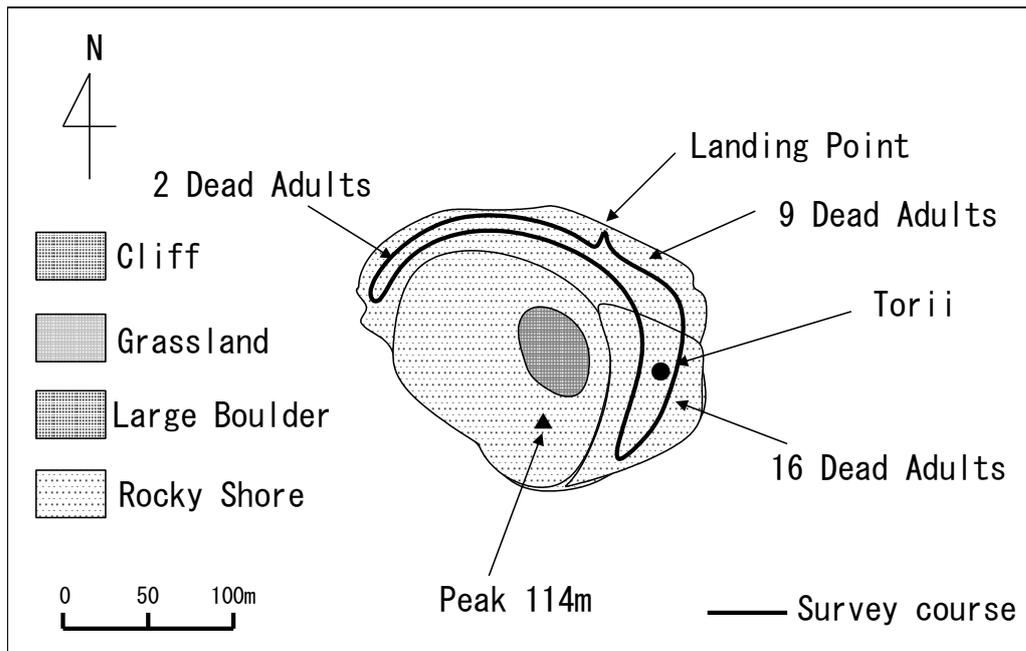


図3-2. 三本岳・子安根におけるカンムリウミスズメの営巣地と死体の確認ポイント



写真 3-3. 捕食されたカンムリウミスズメの卵



写真 3-4. 捕食されたカンムリウミスズメの卵



写真 3-5. 捕食されたカンムリウミスズメの死体



写真 3-6. 子安根（カンムリウミスズメの営巣地付近の写真）

## 4. カンムリウミスズメ普及部門事業報告

### 概 要

三宅島アカコッコ館では、三宅島に新たな海のエコツアーメニューを作ることを目標に、「カンムリウミスズメのモデルツアー」を2006年度から開催をしている。このツアーは多くの人にカンムリウミスズメを見てもらうことで、地域に経済的な価値を生み出しつつ、カンムリウミスズメが住む海を守ろうという意識の高揚、保全に結び付けていくことを目標に開催をしている。

2006年度はツアー開催にあたり、カンムリウミスズメについて普及することを目指し、カンムリウミスズメの専門家を招きセミナーを開催した。また2006年度以降は毎年、ツアーの開催を行っている。以下で報告する。

### (1)カンムリウミスズメセミナー「カンムリウミスズメの現状と保護」の開催

#### 【目 的】

- ・セミナーを通してカンムリウミスズメの生態や生息状況、希少性について知り、カンムリウミスズメに関心を持ってもらう。
- ・カンムリウミスズメツアーの実施にあたっての課題等の抽出を行い、ツアー実現に向けてのイメージを持てるようにする。

【日 時】2006年5月13日(土) 19:30～22:00 【会 場】アカコッコ館 視聴覚棟

【講 師】パネラー：小野宏治(環境省東北北海道事務所)、

山本裕(アカコッコ館レンジャー)

司 会：篠木秀紀(アカコッコ館レンジャー)

#### 【内 容】

- ①小野宏治氏講演 「カンムリウミスズメの現状と保護」(80分)
- ②山本裕氏講演 「三宅島大野原島のカンムリウミスズメの現状と課題」(30分)
- ③ディスカッション「カンムリウミスズメエコツアー実施を目指して」(20分)

#### 【結 果】

- ・セミナーには島内・外から合計31名が参加した。
- ・小野氏の講演では、カンムリウミスズメの研究活動について、北海道で行ってきた海鳥の保全活動を中心に話題提供があった。
- ・山本氏の講演では、三宅島でのカンムリウミスズメの生息状況、三宅島でこれまで行ってきたカンムリウミスズメの取り組みについて話題提供があった。
- ・ディスカッションでは、三宅島でのウミスズメツアーの今後の可能性や、セミナーの感想など、演者、参加者間で活発な意見交換がなされていた。



写真4-1. カムリウミスズメセミナーの様子



**伊豆諸島・三宅島**

**鳥類の側面から見た三宅島の重要性**

1. 固有種、固有亜種の生息地
2. 海鳥の繁殖地  
伊豆諸島の島とその属島は海鳥の繁殖地となっている。三宅島では大野原島(三本岳)。カムリウミスズメ、アホウドリ、オオミスナギドリ、オーストンウミツバメ等。
3. 渡り鳥の中継地  
春秋の渡りの時期には、シギ・チドリ類、サギ類、ヒタキ類、セキレイ類など約60種が通過。

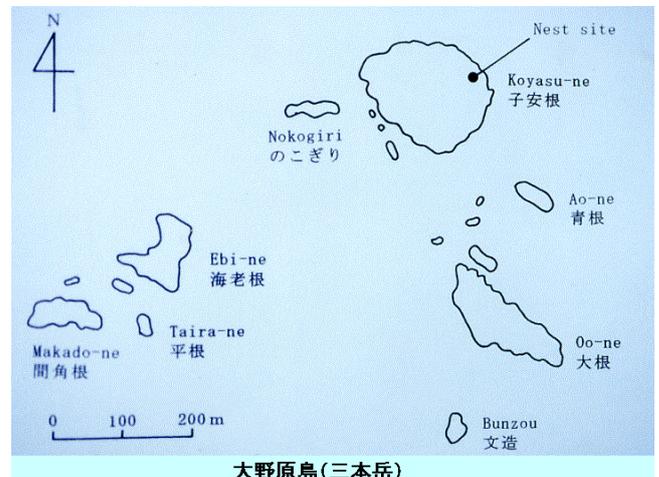
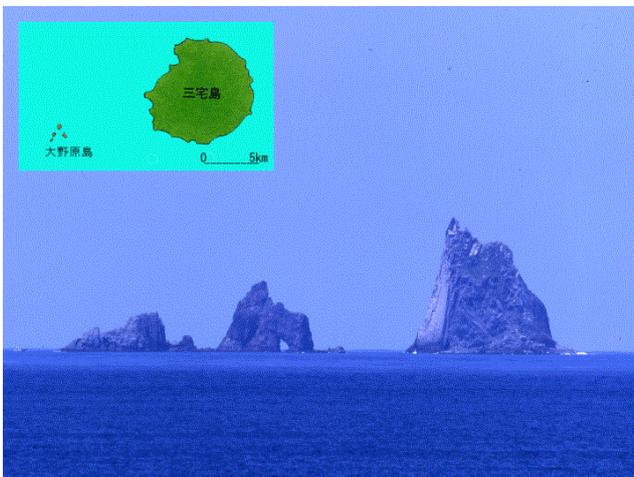


図4-1. アカコッコ館レンジャー講演スライド

カンムリウミスズメと  
繁殖地・大野原島の子安根



伊豆諸島全体 350~850ペア  
大野原島 75~100ペア

大野原島(三本岳) のカンムリウミスズメ保護の歴史

■ジャック・モイヤーさんが守った三本岳のカンムリウミスズメ(年表)

- ・1952年 朝鮮戦争の爆撃訓練の的として、三本岳が使われていた。  
アメリカ大統領・トルーマン、フィンレター空軍長官に爆撃中止の手紙を出す。受け入れられる。
- ・1953年 上陸調査。7巣を確認。
- ・1957年 上陸調査。19巣を確認。
- ・1985年 (東邦大・長谷川博氏。営巣を再確認)
- ・1994年 上陸調査(Harry Carter氏+WBSJ)。9巣を確認。
- ・1995年 上陸調査。3巣を確認(WBSJ)。
- ・1995年~2005年  
洋上分布調査継続して実施(WBSJ)。



調査中のジャック・モイヤーさん



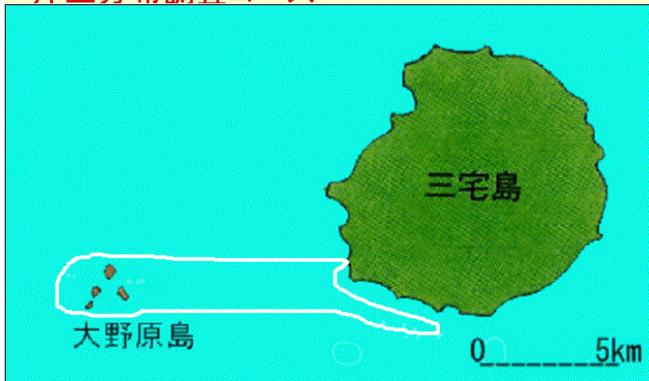
自然解説を行うジャック・モイヤーさん



■■■調査の目的■■■

1. 漁船からの洋上分布調査
  - ①洋上の分布を知る。
  - ②個体数の推移を把握する。
2. 繁殖地への上陸調査
  - ①繁殖地の状況を知る。

洋上分布調査コース

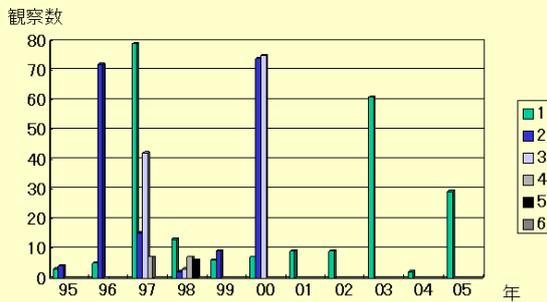


カンムリウミスズメがよく見られる海域(●:1995年~2005年)



図 4-1. アカコッコ館レンジャー講演スライド

## 洋上での観察数の推移(三本岳～立根沖間)



1995年5月1日調査

### 上陸調査で捕食が明らかに！



・3巣を確認(標高10～15m付近の岩の隙間)。何者かにより卵が捕食。

・27羽の成鳥の死体を確認。

東側で16羽。北東側で9羽。北西側で2羽。

## ■■■調査のまとめ■■■

### 1. 漁船からの洋上分布調査

#### ①洋上の分布

三本岳の北側海域、三宅島の南西側海域に多い。

#### ②個体数の推移

現状では洋上分布調査からは、はっきりとした傾向は見られない。

### 2. 繁殖地への上陸調査

#### ①繁殖地の状況

何者かの捕食者がいる。

### ○これまでに明らかになっているカンムリウミスズメの個体数減少の要因

- ①「漁網による混獲」
  - ②「繁殖地での捕食(カラス類、ネズミ類等)」
  - ③「釣り人等による繁殖地の攪乱」
  - ④「油汚染」
- ※減少要因の可能性のあるものとして「化学物質」

### ○三宅島・三本岳での観察例として

②、③が相当。

一釣り人が繁殖地近くの岩礁に立ち入り。コマセ、ゴミを放置することで捕食者が誘引されている。

- ・ウミネコによる捕食例あり。
- ・ハシブトガラスがほぼ毎年観察されている。(年によってはハヤブサによる捕食もある)

### □カンムリウミスズメ・モデルエコツアーによる保護の試み

#### 「自然を見せることで、自然を守る」というエコツーリズムの手法の一事例。

→多くの人(1回あたりは少人数でも)に見ていただきながら、経済的な価値を生み出し、保全につなげることを目的としている。

#### (特徴)

- ・海鳥への負荷を与えない。
- ・専門ガイドが同乗し、環境教育的な要素を盛り込む。
- ・ルールへの遵守。
- ・繁殖地の保全をしつつ、長期的に鳥を見ていただくことで経済的な効果が期待できる。

### ■ウォッチングルール(案)

- ・5月に実施(カンムリウミスズメの繁殖期がほぼ終わっているため。
- ・繁殖地には上陸しない。繁殖地の150m以内には近づかない。
- ・洋上にいる鳥を観察し、鳥を飛ばさない(10m以内には近づかない)。
- ・1日2回(午前・午後各1回、3隻まで)
- ・定員8名。料金:3,000円(2時間、2006年)
- ・ライフジャケット着用。
- ・船長、ガイドの指示に従い、行動する。
- ・船上では危ないので、船長、ガイドの指示がない場合にはむやみに立たない、動かない。
- ・カンムリウミスズメを驚かすような大声を出さない。
- ・ゴミを出さない、写真はストロボ禁止。

図4-1. アカコッコ館レンジャー講演スライド

## (2)カンムリウミスズメウォッチングツアーについて

### 【目的】

- ・多くの人にカンムリウミスズメを見てもらうことで、地域に経済的な価値も生み出しつつ、かつカンムリウミスズメが住む海を守ろうという意識の高揚、支援者を増やし、保全に結び付けていく。

### 【方法】

- ・三宅島の漁師・船主会に協力いただき、カンムリウミスズメウォッチング用に船をチャーターして開催をした。料金は船の実費分のみ参加者負担(1人3,000円負担)として開催をした。ガイドはレンジャーが行った。

### 【特徴】

- ・海鳥への負荷を与えない。
- ・専門ガイドが同乗し、環境教育的な要素を盛り込む。
- ・ルールの遵守。
- ・繁殖地の保全をしつつ長期的に鳥を見ていただくことで経済的な効果が期待できる。

### 【結果】

#### ●2006年度

【日程】5月10日(水)参加者:6名

※5月10日(水)~5月13日(土)まで合計5回計画をして、海況不良のため4回は中止となった。

#### ●2007年度

※5月18日(土)、19日(日)に2回計画をしたが、は海況不良のため中止となった。

#### ●2008年度

【日程】5月17日(土)参加者:9名 ※5月18日は海況不良のため中止となった。

毎回、申込みはほぼ定員に達する人気のプログラムとなっている。普段はなかなか見ることの出来ないカンムリウミスズメを観察できるため、参加者の満足度の高いプログラムとなっている。しかし、この時期は海況が安定せず、中止になることが多い。またカンムリウミスズメは5月の下旬には三宅島から離れていくために、イベントが開催できる日が限られてしまい、イベントとして設定するには難しいプログラムではある。現在は中止になった際には、別の日に機会を設けるなど、開催日の変更等に対応できるような体制とはなっていない。今後、来訪者の満足度を上げていくためには、民間ベースでの実施についても検討していきたい。その際には村の中での実施体制の構築と、カンムリウミスズメの保全にも配慮したウォッチングルール等の整備が不可欠である。今後の課題として検討していきたい。



写真4-2. カンムリウミスズメウォッチング オリエンテーション

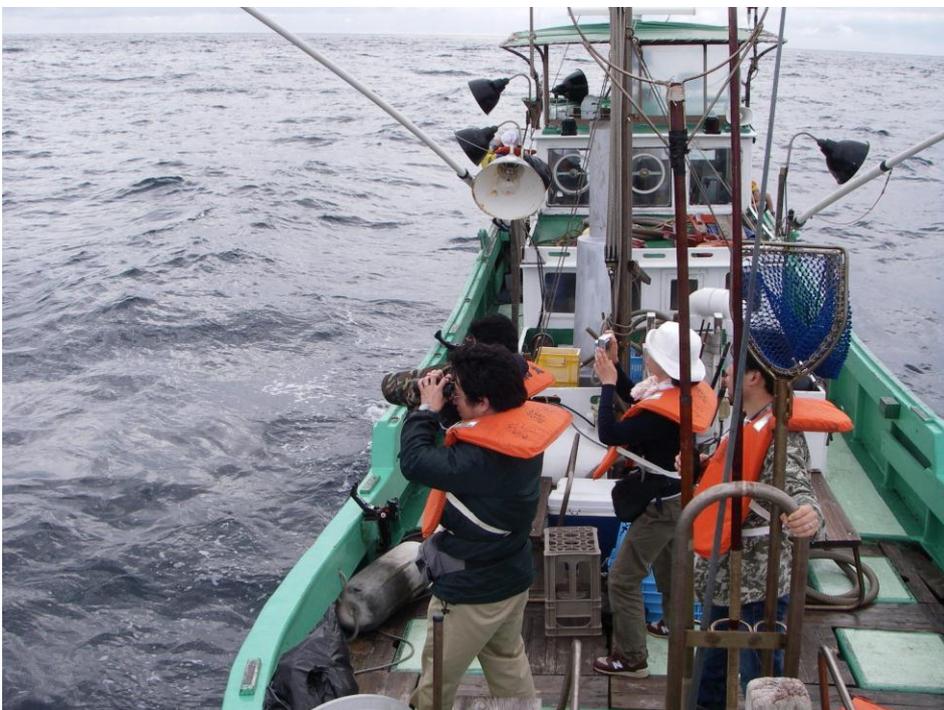


写真4-3. カンムリウミスズメウォッチング 漁船からの観察

## 5. さいごに

(財)日本野鳥の会は2009年、創立から75周年を迎えます。これまで希少種を守る活動としてタンチョウ、シマフクロウを守る取り組みに特に力を入れてきましたが、これを機に、新たに海鳥であるカンムリウミスズメを守る取り組みに着手します。

当会ではサンクチュアリのある三宅島をはじめ、また一部支部でもカンムリウミスズメを守る取り組みを行っていることから、カンムリウミスズメを保護対象種として選びました。

今後の活動としては、伊豆諸島を中心にその生息状況を調べ、また各生息地に関わる活動家や研究者が参加できるネットワークの構築等を行っていきます。

この報告書で報告しているこれまでで行ってきた取り組みを基礎として、今後さらに活動を発展させて、カンムリウミスズメとカンムリウミスズメが暮らす海の保全をすすめていきます。

最後になりましたが、故ジャック・モイヤー氏にはご自身のこれまでのカンムリウミスズメの保全活動の経験から多くのご助言・ご指導をいただきました。津村一氏には、調査のサポート等多くのご協力をいただきました。海運丸船長である佐々木弘佳氏、北洋丸船長である北川洋夫氏には大変お世話になりました。特に、操船技術と海上でカンムリウミスズメを見つける船長の目にはとても助けられました。調査では三宅島自然ふれあい友の会の会員をはじめとして多くの方々にご参加いただきました。この報告書をまとめるにあたって、藤原希氏には調査データのまとめを一手に引き受けていただきました。アカコッコ館の委託主である三宅村には多大なご協力をいただきました。ここに改めて深くみなさまのご協力に感謝いたします。

<カンムリウミスズメ調査参加者（敬称略、順不同）>

ジャック・モイヤー、小林豊、山本裕、山本英生、江川数美、リー・オチクボ、ジェームス・ストラウス、谷秀治、百瀬浩、上川内あづさ、谷秀治、津村一、日高哲二、加賀美智子、海野義明、穴原甲一郎、穴原美奈、川辺直道、池田雅彦、青谷知己、保坂優子、山本隆志、佐々木聡、保坂優子、倉田広、倉田由加里、中山哲、真壁繁樹、キャサリン・ダジンスキー、Soehat、大嶽隆、マイク、野村環、秋元、上村雅彦、渡辺宣子、高瀬優子、南谷やすえ、栗田みさ、秋山聡、津田、山田泰広、林英子、市川智子、濱外晴美、加藤七枝、篠木秀紀、穴原航太郎、北川一枝、江崎逸郎

財団法人 日本野鳥の会

カンムリウミスズメ事業報告（1995年度～2008年度）

発行日：2009年6月

編集・発行：財団法人日本野鳥の会

■西五反田事務所

〒141-0031 東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

電話番号：03-5436-2624

■三宅島自然ふれあいセンターアカッコ館

〒100-1211 東京都三宅島三宅村坪田 4188

電話番号：04994-6-0410